

特集 2 : *towards2010* 「総裁に聞く」



日時： 2009年5月4日（月） 10時00分～11時30分

場所： 寛仁親王殿下邸

ゲスト： 寛仁親王殿下 (IAUD 総裁)

聞き手： 成川匡文 (IAUD 理事長／情報交流センター所長)

川原啓嗣 (IAUD 専務理事／情報交流センター副所長)

川原久美子 (IAUD 事務局長)

成川： 新しく理事長となりました成川です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

さて、2010年国際会議開催まで1年半となり、4月には実行委員会第1回のキックオフを開催しました。このような経済状況の中、実行委員である理事の方々は国際会議の開催に関して危機感を持っており、厳しい意見がいろいろ出ています。一方、山本会長や岡本評議員会議長にもお話を伺っております。その中で実行委員会と会長や議長の思いとの橋渡しをする必要性を感じました。是非ここは設立当初の理念に立ち戻って、理事の方々にも意欲を新たに前向きに進んでいただきたいと思っているのですが、どんな思いでIAUDをお作りになったのか、設立前にどんなことがあったのかということを含め、設立に関わられた殿下や会長、議長の思い、あるいは生の声を理事や会員の皆様に伝えたいと考え、まず初めに殿下にご登場いただき、いろいろなお話を伺えればと思いました。

殿下： 話が前後するかもしれませんが、こういう経済状態ですから国際会議を開催できるかどうかということはクールに考えた方がよいですね。本当に財政的に厳しいのだとすれば仕方の無いことですから、見送るということが一つの選択肢としてあって構わないと思うし、規模を縮小してお金がかからないように開催するというのも一つの考え方だと私は思います。ですから何が何でも

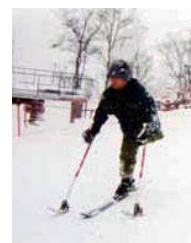
前回と同じとか、もっと格好良くやろうなんてことは無理がきてしまうと思いますから、お金のかからない方法でやるか思い切ってやめてしまうかということもあっていいと思います。

成川： 京都レヴェルはとても無理だろう、しかし、継続する事に意義があるので、決して止めるべきではないというのが岡本議長のご意見でした。資金不足で立派にやるというのが無理ならば、理事をはじめ会員を総動員し、手作りで働けということなのです。予算は「松・竹・梅」でいえば、「梅」の下の「小梅」かもしれないけれども、見映えは「松」にしようと、たいへん前向きなご意見をいただきました。山本会長も同じようなお考えです。殿下には協賛依頼文書を理事各社に出していただき、たいへん感謝しております。それを受け、これから具体的な協賛のお願いに回りますが、必ずしも悲観的な意見ばかりではありません。

川原久： 殿下から直接お手紙を受け取った各企業トップの方々からはなんとか応援しようと言っていると思います。しかしながら理事の方々はどうのように協力すべきか悩まれているのもう少し具体的に、各社の希望に沿うような形で考えていかなければならないと思っています。

成川： 経済的に各社がどうするかだけではなく、なぜ IAUD が活動するのか、なぜ国際会議を開催するのかということを社内で説明できるよう、IAUD から情報発信していかなければいけない。そういう意味で設立の意義等について、殿下をはじめとする皆様にあらためて伺い、直接伝えていきたいと考えています。

殿下： IAUD 設立の随分前だと思いますけれども、川原さんを初めとする4〜5名のデザイナーが集まった時に、ユニヴァーサルデザイン(UD)はアメリカが先進国でもう何度か会議をやっている、そこへ日本や諸外国から手弁当で参加しているのですという話を聞きました。これから絶対 UD は世界中で大事な事柄になっていくわけだから日本としてもちゃんと取り上げていきたいというようなお話を聞いて、これは素晴らしい事だと感じました。川原さんは永らく身体障害者のための生活機器のデザインを専門にやっていて、私は福祉をずっと(37年間)やってきていますから、そういった関係で彼の付き合いがあって、UD が身障機器のみならず、もっと大きな分野を含むことなのだというのもっと皆さんが分かるためにも何かしなければと話していたんですね。それで彼等の希望の中の一つに、国際会議を日本に持ってきてほしいというのがありましたから、私は札幌オリンピックとか沖縄海洋博のような国際会議をたくさん運営してきたということがあるので、じゃあやりましょうということになったのですが、実行委員会を作る時に困ったのはその当時、既に経産省が管轄する(財)共用品推進機構や、任意団体のユニバーサルデザインフォーラム、ユニバーサルデザインコンソーシアム等があって、必ずしも UD に対する考え方が共通していなかったんです。川原さん達は純粋に UD が今のような形になることを望んでいたのですが、既存の団体の中にはちょっと違う発想というか、どちらかと言えば障害者のための研究というようなことを盛んに言っているということで、意見がまとまらないことがありました。そこでスポンサーをどうしようかという時に日本経済新聞社がやりましょうと言ってくれたのだけれども、結局、空中分解してしまって、私は UD の国際会議を日本に誘致するのはもうやめた方がいいのかと思った時期もあったのですが、なんとか横浜でやろうということになって、富士通の山本さんに話を持って行った。それからパナソニックがすぐ続いてくれて、それがとても大きな広がりになり、結果的には思いがけなく 100 社近くの大企業が乗ってくれたわけです。横浜会議は我々が生みの苦しみの後に大成功したわけですが、その時まだ各社の中には本物の UD とは何なのかということは完璧には浸透していなかったと思いますよ。その時点では、まだある決められた枠の中の UD という段階でしたね。そこで、私が今使用している人工咽頭のような機器ももちろん UD でなければいけないし、スキーの教師をしていたからアウトリガーという障害者のためのスキーの補助具があるんですけれども、それを作ってもらったり、川原さんがデザインした盲人用の目覚まし時計を精工舎(服部セイコー)に持ち込んで製品化したり、色々なことを



アウトリガー使用の様子

やりましたから、自分なりに UD の素晴らしさというものをわかっていたのです。また、都市計画や公共交通機関の駅とか建物まで UD を広げていかなければいけないわけで、これは障害者のためのものだけではなくて、乳幼児から高齢者まで全ての人類のために UD はあるべきなんだということを、口を酸っぱくして皆さんに説明していた。それがだんだん各企業の方々理解して下さるようになって、そうなるやっばり会社は利潤を追求する組織だから、自分達で作っていく製品もそういうことを考えていかなければいけないんだって分かり始めてくれたんですね。横浜会議に続き、リオデジャネイロ、そして京都会議へと続いてきたわけですけども、その中で IAUD のポリシーがだんだんと確立してきたのだと思います。

成川： ちょっと横道にそれですけど、川原さんと殿下とのご関係はいつ頃からですか。

川原： 1981 年からです。

殿下： これがすごく変わっているんですよ。彼は九州芸術工科大学を出てからロイヤルカレッジ・オブ・アートに留学していたわけですけども、ヨーロッパで賞を総なめにした(笑)。今から5代か6代前の駐日英国大使にウォーナーさんという人がいまして、そのご夫人のレディ・ウォーナーという方は私と仲が良かった。英国に帰った彼女が向こうで彼の作品を知って私に紹介した方がいいと思っただけなんです。彼女は私が障害者のための仕事をしていることを知っていたので、まず私の義母に連絡をした。麻生和子さんという、うちのかみさんのお母さんですけども、日英協会の重鎮でした。義母がその話を私のところに持って来て、彼が帰ってきたら会ってみましょうということになった。義母の紹介で彼が私のところに来た際に、彼の作品集を見てみると見事なものがたくさんあったんですね。ホーバークラフトの原理で空中に浮いて障害者が自由に移動できる遊具とかいろいろなものがありました。その中で一番製品化できそうだったのが、さっきお話しした盲人でも我々健常者でも使える置時計でした。それを私と売り込みに行ったんですよ。精工舎の話では300人位自社のデザイナーがいて過去に1度だけ外部にデザインを頼んだことがあるが、ほとんどは社内でやっている。それが、川原さんのデザインはとて素晴らしいので採用しようということになった。そして製品化され「タッチ・ミー」という名前でも市販されたんです。私も長いことそれを愛用していました。その後、個人的に障害者の大会のエンブレムのデザインを頼んだり、その他いろんなことをするようになった延長線上に彼のデザイナー仲間を私のところに連れて来て今の話につながっていったわけですね。



タッチ・ミー

成川： 川原さんみたいなデザイナーは何人かいらっしゃるのですか。

川原： 当時から、身体障害者のためのデザインをやっている方は何人かいましたけれど、いわゆる福祉機器の発想でやっている方がほとんどでした。私は福祉機器でやっている限りはあまり一般に流通しないし、メーカーも製造しにくい。ロットが少ないとコストダウンもはかれず、利益も出ないので企業はなかなか作りたがらない。どうにかして大量生産できるような手法を採用しなければだめだなんて考えていたのです。大学でもそうした研究をしていたんですが、そういったところが少し他の方と違っていました。

成川： 企業的に考えると最初からロットの少ないマーケットの小さいものは当然はじかれてしまいます。企業の中ではなく外部のデザイナーが提案すれば発展性があるので、いい面があるはずですよ。デザイナーの発想に対して企業がどう展開していくかという仕組みができるといいなと思います。IAUDにも企業のデザイナーが参加していて、皆さん専門家ですからいろいろ考えますけれども、そこはどうしても企業の論理が入ってくるのかなと感じますね。IAUD 設立のお話を聞いていると資金面で大企業が手伝ってくれないとうまくいかないことは多分にあると思いますけれど、その辺りをどうしていくかということが一つの大きな課題かなと思います。

殿下： 大きな会社であれ中小企業であれ、そこで働く人々がUDの重要性を認識しているかどうかだと思いますよ。

成川： 基本的には先ほど殿下がおっしゃった子供から高齢者まで皆が上手に使えるといった発想でやっていけばいろいろなものができると思うんですね。そういう仕組みをどう作っていくかが大きな課題ですけど。

殿下： パナソニックが投入口が斜めになった変わった形の洗濯機を開発しましたよね。主婦の方々は使いやすいとあってブームになったことがあった。あれは外部のデザイナーのアドバイスで作ったわけではなく、社内で自然発生的にああいったものに仕上がったそうですね。裏話としては私の福祉団体では車いすの人達には依然として使いにくいんだそうですよ。車いすの女性達は口々に役に立たないって言っていました。でも一般の主婦にとっては使いやすいということらしいです。それから例えば中部国際空港(セントレア)なんかも空港公団が障害者団体を最初の設計の段階から実行委員会



の中に入れて皆で考えたんですね。だからあそこは全部スロープになっていて階段がほとんどなかったり、革新的なのは今までいろんな公共施設の中に車いす専用トイレというのがありましたけど、障害者の意見で、あれもある種特別だっことで通常の男子用、女子用のトイレに車いすが入れるスペースをとった。すごく大きなお手洗いになっちゃうそうですけれども、中部国際空港はそういう革新的な試みをやったんですね。だから日本国中にそういったUDの重要性というのは十二分に浸透していると思いますし、その後に行われた愛・地球博は私も向こうの事務総長達に口をすっぱくして色々な事を言って、職員や係員達に何度も講義をやりましたけれども、乳児、妊婦から高齢者、あるいは外国人、そういった何らかのハンディキャップを持った人達がこの愛・地球博に来た時、どうやったら素晴らしい何気ないおもてなしができるかということをやボランティアセンターで何十回もミーティングをやって周知徹底したんですね。その結果、障害者や高齢者にやり過ぎる位面倒を見る万博になってしまって、健常者がなんとなく肩身が狭い思いをしてしまうみたいな逆転現象が起きたんです。広い所を歩くわけですから老人も車いすを使用するだろうと考えて、実行委員会は何百台という車いすを用意してくれた。そして私達のアドバイスで車いすの前輪にショックアブソーバー、これは戦車のキャタピラとかそういったものを作っているカヤバ工業という中小企業の加藤君というデザイナーが作ったんですが、取付けてくれました。だから車いすで歩く人達は障害者であれ高齢者であれ、みんな満足してくれたみたいだし、それから私はモーターショーの親分をやってるものですから日本自動車工業会に話をつけて傘下の会社の低床バスを貸してくれと言ったら、あっという間に彼らはそれを理解してくれて、万博の期間中はその低床バスが縦横無尽にいろんな所から人々を運んだわけですね。だから障害者も喜んだかもしれないけれども赤ちゃんや幼児を連れているお母さんや高齢者は低床バスのおかげで非常に喜んだと思いますよ。そういう意味で歩みはゆっくりかもしれないけれども国家的イベントにまでUDの発想が持ち込まれたってことは、デザイナー4、5人がこれからはUDで行くべきだと考えて始めた、そういった熱い思いが本当に今、現実化したっていう、私はたいしたもんだと思って見ているんですけどね。

成川： そうですね。そういう意味で低床バスも普及してきたし、だんだんと広まってはきているんだと思います。空港や万博等のイベントだけではなくて普通の住宅とか事務所とかに広がっていったくれるといいですね。先ほどの自動車工業会の話じゃないですが、殿下が言っていたように広がるんじゃないかと、やはりIAUDみたいな所がそういった役目をしないといけないという気がします。デザイナーが最初に集まって殿下と一緒にそうした思いで始めた、殿下は思いを引き継いでやって下さっているのだからIAUDも、もっと役割りを果たさないといけませんね。空港を作る、公共施設

を作るという時に IAUD に「どうしたらいいの」とお願いに来るような、そんな団体にしたいというように皆さん思っているはずですが、それをどうしたらいいかというのは大きな課題かなと思います。

殿下： 中部国際空港の話をしましたけれども、その時に私は IAUD に君達が行ってこいって言えばよかったんだね。

成川： そういう意味では空港とか万博とかになると UD の必要性は皆さん分かっているし、いろいろな人が来る。外国からも来る、そうなるとうろねという話になるんですが、本来はもっとさりげないところで、住宅を造るとか、ビルを建てるとかといった時に普通に UD の考え方が入ってくるというのが理想なのかなという思いはありますね。

川原： 例えば建築基準法でスロープの勾配を 1/10～1/12 にしなさいというのは、70 年代から決まっています。またドアの間口を車いすが通れるように最低 80cm 確保しなさいとか、ミニマムの数値基準はあるのですが、なかなかそれ以上質の高い方向に動いていかなかったんですね。

成川： ある程度 UD の考え方がそういう規準に入り込んではいっていますが、作る人達がそう思っていない。単に規準の中でやっている。基準最低限の幅をとっておけばいい、そうではなくていかにして使うかをちゃんと考える。そういう所に UD の考え方が建築家やデザイナーに自然に入り込んで行くようなのが理想で、その一助になりたいというのはありますね。

殿下： 工業デザイナーは入っているけれども、成川さんが言うような建築家も IAUD のメンバーに入れた方がいいですね。

成川： そうですね。大きな設計事務所は会員に入っていますけれど、個人の建築家で意識の高い方にも是非入ってもらった方がいいのかなと思います。

殿下： そうですよ。

川原： 大きな設計事務所が、IAUD に入っていることは意味がある、得るものがたくさんあるんだと感してくれればよいのですが。

成川： こういう経済状況では退会したいというような話は担当の部署から金銭的な理由で来る訳ですよ。経営者レベルと話ができると、退会なんてとんでもない、大事なことなんだから何とかするよという話になる場合もあるんです。会社の中での意思疎通が最初はあったのかもしれないけれど、それがいつの間にか定例的に会費を払っているだけみたいなことになってしまうと……。丁寧に説得すればわかっていただけける所もあるので、それはやらなければならないと思います。

川原： 現在 IAUD には 140 社近くの正会員がいますが製造業が多いんですね。メーカーの言い分が強すぎて、サービス業やその他の業態の希望がなかなか通らないというようなクレームも最近聞かれています。製造業に限らず流通業やその他のサービス業の方にも活動に意義を感じてもらえるようなことを考えなくちゃいけないですね。

成川： サービス業の人達が活動して、成果を持ち帰ることで自分達のメリットになる、そんな仕組みが必要ですね。また、このあいだ感じたのは、車の中の UD を検討しているグループではエアコンの操作が分かりにくいので家庭用と同様の使いやすさにしようと活動しているんですが、それを見てもっと車の本質に関わるテーマはないんですかと尋ねたら、それはメーカーが集まると逆にやりにくいとのこと。運転の操作とかカーナビとか、車本体に関わる所は自社でやりたいというような話なんですね。もう一つ感じたのはシートベルト。最近は後ろの座席でも付けなければならない

ですがすごくやりにくい。我々でもやりにくいので、ああいう安全に関わる重要な部分をUDにするというのはすごく大事なことだなと。シートベルト位なら皆で考えてもいいのではと思っているんですが。

川原久： 会員に生命保険会社の方がいらっしゃって、会社で会員になっていただけないですかとお願ひしたんですけれど、UDと生命保険会社が一体何の関係があるかということ会社を説得できない。会社から会費が出ないけれど、自分はUDと生命保険は関係があると思っているから賛助会員として個人で入会しているとのこと。活発に活動していただいているんですが。

殿下： UDと生命保険会社がどういう関係なの？

川原久： UDの普及で人生をより楽しむことができ寿命が延びれば、保険会社は保険金を支払わなくてよいわけです。だからUDで生活をエンジョイするというようなことを保険会社が提案できれば、会社にとってメリットになると個人的に思っているそうです。

殿下： それは面白いね。生命保険会社の重役達にアプローチしてもいいんじゃないですか。おたくの社員にこういうことを考えている人がいるんだから、IAUDと同じ考え方だと。仲間になって下さいと言えるよね。それからJRなんですけれども、面白いのは新幹線の場合、入口のドアは車いすでそのまま通れるんですが、グリーン車の場合は座席をゆったりとってあるから真ん中の通路を車いすが通れないんですね。何度も車いす使用者を連れてスキーに行ったりしたから分かるんですが。改札口も全然車いすが通れないから私の護衛官達が持ち上げて通すわけだね。それから、プラットホームに視覚障害者用の点字ブロックがあるでしょう。JRは全部プラットホームの端から何cmというところに決められて置いてあるかもしれませんが、私鉄の例えば東武とか西武とは位置が違ってはいるんですよ。だから全国の鉄道会社で共通の点字ブロックからホームの端までの標準化を考えなければいけないはずなのに各社独自でやっているわけです。

成川： それこそIAUDの標準化WGのようなところで点字ブロックの位置を標準化する、それを広めていけばどこに行っても大体自分がどの位置にいるかわかるというようになるんですよ。

殿下： 盲人は勘がいいから、自分がいつも通っているようなところを歩く時は、ここはこれだけだから何歩で歩くとわかってはいるのだけれども、知らない所を歩く時にはホームから落っこちったりするんですよ。

川原： まだまだそういう生の声が届いていないんですね。点字ブロックの位置の違いは私も知りませんでした。

成川： そういう具体的な話があるんですよ。先ほどの保険の話で面白いと思ったのは、例えば家を作る時にUDにしていれば怪我が少ないとか火事が少ないとか、そうすると料率の安い保険が成立する新製品になるってことを考えているんじゃないかと思うんですよ。生活のいろいろな事を研究しているはずなので、会社として会員になっていただけるとたいへん有難いですね。

川原久： 殿下がおっしゃった、現場の方々がどういう思いで参加されているかということを上の方に伝えていただければいいですね。

成川： 下で意識を持って活動しているのが伝わらないとか、上で会社としてやるべきだと思っているのに下に伝わらないという、両方のケースがあると思います。

川原： 経営トップ、会社の上層部がそういう思いに目覚めると、舵取りが早いですよね。パナソニックでかつて中村さんが社長の頃には、パナソニックの商品はすべてUD対応にすべしと檄を飛ばされたそうです。

成川： あと、私が感じていたのはユーザーとの つながりというか、先ほどの点字ブロックの位置なんていうのはユーザーの声がないとなかなかわからないじゃないですか。そういうものをどうやって集めるか、どうやってユーザーとコンタクトを取るかというのはずっと課題ですね。殿下がやっておられる柏朋会の皆さんとか AJU 自立の家の皆さんともう少し密な関わりを持った方がいいのかなと思います。

川原久： 今、柏朋会の鈴木ひとみさんが各PJを見学しておられて、その中で自分の考えとマッチする所を探して参加したいとおっしゃっています。

殿下： この間、「ざ・とど」という柏朋会の会報の中で、「障害者福祉の非常識の数々」というタイトルでシリーズものをやったんですよ。そうしたら本当に、我々が呆れ返ってしまうようなおかしな問題が出てきました。建設会社のせいなのか建設省なのか知らないけれども、新築の家の車の出入りのために車道までスロープにしたことで歩道が分断されて車いすの人が通りにくくなったことがあったらしい。その住宅の人にはいいんだろけれども、歩行者にはえらい迷惑なんですね。また、例えば駅に車いすのことを考えてエレベータやエスカレータができたりしたけれど、愉快なのはエスカレータの所に車いすが来ると駅員が飛んで来て面倒をみてくれるんだって。ところがそれにかかりきりになるために、エスカレータを使いたい一般の人が、その車いす一台のために通れずに階段を上らないといけないとかね。

川原： エスカレータを一旦止めて、ステップをいくつか平らにして車いすを乗せるというタイプがあるのですが、その操作をする間は他の人は使えないことになるわけですね。

殿下： そうなっちゃうと意味ないね。面白いことがいっぱいあるんです。我々の仲間には本当にはずかしい思いをする事があると言っています。

川原久： 「障害者福祉の非常識の数々」のような話を会社の上の方々にも聞いていただきたいですね。この前も柏朋会の会合に成川さん他、何名かのデザイナーと一緒に参加しましたがけれども、現場の人達が言うには、是非ああいう場をトップの人達に聞いてもらって肌で感じてもらわなければちっとも前に進まないんだと。柏朋会の例会に各社の経営トップの方々にも参加いただくような場を作って欲しいと言っていました。

成川： 確かに会社のトップに訴えるのが一番早いというのはありますね。やはりサラリーマンとしては担当者が自分でトップに伝えるように努力してもらわないと困るんですけど。「障害者福祉の



非常識の数々」は大きな意味がありましたね。エレベータ、バス、電車、トイレの問題・・・生の声がいろいろあってそれを鉄道会社の人、車やバスを作っている人、トイレを作っている人に聞いてもらえる機会って大事だと思いますよ。聞いてきた話をちゃんと社内で展開していただければだいぶ違うと思いますね。おそらくUDの考え方は会社のトップの方が聞いて、ダメだという人はいないはずですよ。いかにしてもっていくかということだと思います。

川原： それと、よく聞くのは社内の上下関係や組織の壁があって伝えにくいということ。これは UD に限った話ではなくて、例えば我々デザイン事務所がコンサルティングで商品開発のお手伝いをする際に、現場の人が思っている事を我々のような外部の人間に言わせるんですね。私はコンサルティングの立場で経営トップと直接話ができるわけです。ところが、現場の人はなかなか直接社長と話ができないので、彼らが思っている事を私の考えの中に入れてながら社長に話すという、一見まわりくどいと思われるやり方ですが、これが結構、効果的なようです。

成川： 確かに企業も外圧には弱いところがありますから。同じ事でも社内から言うよりコンサルタントのような外部から言ってもらうと、うまく通ることがありますね。

殿下： 我々福祉をやっている人間の中で一番大事なのは啓蒙活動と実践活動だと言っているんです。IAUD の方々も実際の物の研究開発ばかりじゃなくて、こういう不便があるとか、こういう状態になってしまっているという啓蒙活動を一所懸命やるような雰囲気を作って欲しいと思います。コミュニケーションを一所懸命とる、説得工作をする、そういう事・・・、自分はデザイナーだから説得することはどうも下手でと言う人がいるかもしれないけれども、障害者問題を一般の人達に分からせるというのは大変な啓蒙活動が必要なんです。皆さんは障害者を見てしまうとそのままストレートに話しかけていいのかわからないというのが大多数でしょうから、気にしないで視診、問診、触診をしろと私はいつも言っているんです。私が全国で言うようになったこの何十年間で障害者を見る一般の目が随分変わったと思います。駅やホテルのエレベータの低い所に点字付きのボタンが付いたのはうれしいのだけれども、問題は一緒に乗った他の人が車いすに乗った人をなんとも言えない目で見ています。せっかく箱そのものは UD になったけれども、人の目は相変わらず昔と同じなんです。だから私は会報のシリーズの結論として、ハード面は素晴らしくなったけれども人間の目というか考え方をもっと直していかないと本物にはならない。だからそういった意味で皆さん方も、老人であれ外人であれ障害者であれ誰が来ても何て事ないんだという事をもっともって自覚するよう、UD や IAUD に関わる中で言って欲しいと思います。

成川： 衣食住だけじゃなくて、何の UD って言ってもいいかわからないですけど、そういうのが一番必要ですね。それがあれば逆にいろんなものが生まれてくると思います。

川原久： 国土交通省は UD を推進するのにハード面だけではなく「心の UD」という文言を政策の中に入れてようとしているようですね。となると、道徳や教育に近いので、文部科学省の管轄じゃないかと言う人も中にはいるそうですけれども。

殿下： 交通標識みたいなものが外国人のために全くわからない場合がありますよね。全部漢字やなんかで書いてあるから。その辺から直してもらわないと困りますよ。

川原： 2006 年の京都での国際会議の時に各省庁がどういう UD の施策を立てているかということを引き出すために、セッションを組みましたね。国土交通省、経済産業省、厚生労働省、総務省等々参加いただいたけれど、文部科学省は出てきませんでした。

川原久： 文部科学省の中では UD と言うと養護学校の教育支援の範疇に入り、そこをいじるのは難しいので辞退しますと言われたんです。総務省も自治省の頃は同和問題と接するところがあるから難色を示していたのが、総務省に変わって、通信の UD から進めるとスムーズに入れたということもありましたね。名古屋での昨年度の UD 大会でも同じように文部科学省に後援を依頼したけれども、施策と一致するものがないと断られたんです。

殿下： 文部科学省の場合、触れないところもよくわかるよ。だけど自分のところからやればいいんじゃないですかということもみんなですごく言っていけばいいわけです。でも「心の UD」なんてちょっと格好良すぎますよ。「心の UD」とは何ぞやということをもっと具体的に説明できればうまくい

かない。IAUDの発会式があったじゃないですか。あの時に経産大臣だった中川昭一さんが、ちゃんとまだ素面で(笑)現れて挨拶してくれたじゃない。本来なら経産省がこういうことをやらなきゃいけないのに皆さんが最初にこれを作ってくれたのはとてもうれしいと。私の体験上も、例えば文部科学省が障害者のための機器を考えなきゃいけないというのは当たり前なんだけどやらないから、しょうがなく私達が始めちゃったわけだね。それを後から文部科学省の連中が追認するような格好。それから養護学校の先生達を集めた集会みたいなことを私達はやったんですよ。だからまず民間がやるのが大事で、それを行政にバックアップさせるという方がいいと思いますよ。最初から行政に頼るんじゃないで。なにせ民間の方が自由に動けるんだから。

川原久： だからこそ横浜で国際会議をやって、そのまま解散させるのは惜しいと IAUD を作った。当時の経済産業省デザイン政策室長の清水さんも、国際会議なんて民間でしかやれないので、どんどんやってほしいと言っていましたね。今、法人化の話をしていますけれども、当時、彼は、法人化だけが方法じゃないですよ、任意団体のままで自由にやった方がいいんじゃないですか。なまじ経済産業省の傘下に組み入れられると拘束される部分もあるので、全ての省庁に話ができるような自由な立場でいた方がいいんじゃないですか、ということをおっしゃっていましたね。

殿下： でもなんだかんだ言ってこの UD の発想はみんなに浸透したじゃないですか。

川原： もう6年目に入っていますので、先ほど成川理事長もおっしゃっていましたが、発足当時の理事がもう4〜5名しかなくて、多くの理事が自分達のミッションだとなかなか考えにくいところがあるんじゃないかと思ったりしています。

成川： そういう意味もあって本日そもそもインタビューをお願いしたのは当初からの思いをなるべく伝えていきたいと、いなくなった前の理事、最初からいる情熱のあった理事のインタビューみたいなものもやっていって、新しい理事に伝えていくのもいいかなって気がしています。我々幹部はDNAを伝えていくのが大事な役目かなと思うのです。



殿下： 成川理事長は若い頃何か運動部にいましたか？

成川： 私は野球部でした。準硬式ですが。

殿下： 練習が終わると先輩が飲み連れて行ったりしたんじゃないですか。IAUDだって理事会では表向きの話しかしないでしょうから、後は理事長が皆を引き連れて飲みに行くとか、そんなことも必要だと思いますよ。

成川： 次の理事会の後は懇親会を予定しています。

成川： 最後に、理事会では法人化の話がいろいろ出ていまして、私は時期は別として目指すのはやはり公益法人なのかなと思います。公益性と会員性をどのように折り合いをつけていくのか。会員性の今は会員であれば情報が入るけれども一般の方にはコアな情報は入らない。本来ならば IAUD の情報などというのは一般の方に全て公開したいくらいの気持でいるんです。会員の方は会費を払って情報を得ているのに公開されるというのはどうなのか、いずれどうすればいいか悩むところです。ただ企業のための団体ではないので、ここで作り上げたものは全て公開した方がいいというのが私の思いなんです。

川原： そうなると会費は何のためにあるか、会費を払うメリットがないということにならないか気になります。しっかりサポートできる財政的基盤があれば今でも情報を公開していいと思います。IAUD が

自前で事業をしっかりまわして財源をキープできていればそれもいい。まだちょっと過渡期かなと思います。

殿下： 法人化するとお金の出し入れが難しくなりますよ。AJUは社会福祉法人格を持っていますけれども、柏朋会は任意団体のままにしているんですよ。任意団体の方が運営上は便利なんですよ。ただ世の中のいろいろな説得をするには法人格を持っていた方が安心するんだよね、日本人は。法人化した方がいいかというのは皆さんが、この問題をクリアするためにはどうしても法人化しておかなければならないという問題が出て来た時に初めて考えればいいのかではないでしょうか。

成川： 今我々は法人化をするには経理上とかいろいろなシステムを整えなければならないので、そのためにどうすればいいのか検討はしておきましょう、と考えています。公益法人になるにはこうでなければならないという項目の内、できることはしっかりしていこうかと。法人化するかどうかはメリット、デメリットありますのでよく考えて。理事会での趨勢というのは、法人化した方がいいだろうということですが。知見のある方に相談しながら検討したいと思います。山本会長や岡本議長からもゆっくりやれとおっしゃっていただいていますので焦ってはいません。

成川： さて、最後に殿下からIAUDに対してメッセージをいただければと思います。

殿下： 先ほどお話したように理事の人達を中心となって、UDの重要性を繰り返し繰り返し、皆に啓蒙活動していくということを是非お願いしたい。やっぱり日本人は議論するのが下手だからどうしても会議をやっても自分の意見を全部ぶつける人って少ないですよ。周りの人の顔色を見ながら会議をやっているのが多いから、何でもばんばん言って、いっそ極端な事を言えば、酒を飲みながら夜を徹してやるくらいの迫力があれば、会員獲得でも、製品を作っていく事でもどんどんできると思うんです。だからコミュニケーションの大切さをもっと皆さんにわかってもらいたい。IAUDもまだまだ発展途上ですから、ある程度のレベルになるまでは皆さんがしゃにむにやらないと私はだめだと思う。それを皆さんにお願いをしておきたいですね。特にデザイナー達は作る事はうまいけれどもしゃべることが下手ですから、そして会の運営のようなことはもっと苦手ですから、私がそれをどれほど今までカバーしてきたか・・・(笑)。